

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 12:40~14:00

○ 分科会 I 小学校 第7分科会

「人権教育」

○ 研究主題

「人間尊重の精神に基づき、共に生きる子どもを育てる人権教育及び特別支援教育」

○ 協議題

「子供一人一人の『ウェルビーイング』の向上を支える学校経営を軸にした人権教育の推進」

○ 発表者 さつま町立柏原小学校 石川 雅仁

○ 司会者 さつま町立山崎小学校 柳野 竜生

○ 記録者 さつま町立佐志小学校 渡邊 義幸

【質疑応答】

(質問：花峰小 佐多 瑞代)

・ 発表の最後の方で「方法が目的にならないように」とあったが、そこをもう少し詳しく教えてほしい。

(応答：柏原小 石川 雅仁)

・ 私たちの仕事の中では、方法が前面に出ることが多い。例えば、人間関係づくりでいうと、「構成的グループエンカウンターをどの学級も毎週しましょう」と提案することで、それが目的になってしまう教師もいるのが現状である。なので、丁寧に説明し、何のためにその活動をしているか咀嚼できるように発信していかななくてはならないと考える。

(質問：安房小 淵田 晋平)

・ 発表にあった「子供一人一人が大切にされる授業デザイン」はウェルビーイングの向上につながると考える。そこで、自由進度学習や学習者主体の学びなどを実現する授業に関する職員研修の在り方について教えてほしい。

(応答：柏原小 石川 雅仁)

・ 本校でも、現在進行形で模索している。昨年、着任した際は、「一斉指導の中での」自由進度学習ぐらいまでしか発展していない印象だった。学校で最も児童に接する時間は授業なので、授業改善を推進することが学校経営の根本になると考えて取り組んできた。最初は、トップダウンに近い形での研修だったが、間接的な働きかけで徐々に変容が見られるようになり、今では教師それぞれが授業改善への意見等を自由に伝え合える環境になってきている。特効薬はないが、涵養を促すことが大切である。

(質問：有明小 夏越 伸一)

・ ウェルビーイングの向上を図る学習活動について、学びの選択に関する提示等はどうしているか、自由進

度学習の評価はどうしているか、聞かせてほしい。

(応答：柏原小 石川 雅仁)

・ 学びの選択を複線化しようと、教師から提示して始めたが、高学年の児童はそこを飛び越えて4本目、5本目を考え出すので、上手く発展させている。

・ あ自由進度学習の評価は、ルーブリック評価等を作成すると、それを作成することが目的になりがちである。本校では、これまでの規準をABCと細分化して活用しながら、個に対応している。ルーブリック評価等はまだ作成していない。

【グループ討議後の班ごとの発表】

(G 班)

・ あそれぞれ小規模校であり、全職員で児童一人一人に対して丁寧に対応している。

・ あ児童数が少なく、人間関係が固定されてしまうので、地域との連携を大切にしている。他にも、大学生を招聘したり、運動会に他校の児童を招待したりと、外部との交流を深め、行事等を充実させている。

(B 班)

・ どの学校でも、人権週間・月間や校長講話、児童会活動、標語募集、校内掲示など、継続的に取り組んでいる。職員研修では、水俣病やハンセン病などを取り扱い、人権意識を高めている学校もあった。全国からの留学制度を設けている学校では、保護者の生活背景が広く、その価値観等の多様性を受け止め、関係づくりをしていた。それぞれの学校で、人権教育を推進しているが、やはり繰り返し指導していくことが大切である。

(M 班)

・ どの学校も、自己肯定感を高めることを課題として取り組んでいる。発表校の数値の高さから取組が充実しているとわかるので参考にしていきたい。

・ あ人権教育の取組では、校内人権コーナーの工夫や児童一人一人の目標掲示と活用などで、その成長を見取るよう実践している。また、アイメッセージを意識した指導や保護者・地域と連携して児童を認め、褒める働きかけを推進している。さらに、体験活動をとおして、児童が自分や他者のよさを見付けることができるので、多様な体験活動も大切にしていきたい。

(記録 佐志小 渡邊 義幸)

鹿児島県小中学校長研究大会 分科会記録

○ 日 時 令和6年11月15日(金) 14:15~15:55

○ 分科会Ⅱ 小学校 第7分科会

「人権教育・特別支援教育」

○ 研究主題

「人間尊重の精神に基づき、共に生きる子どもを育てる人権教育及び特別支援教育」

○ 協議題

「子どもの教育的ニーズに応え、一人一人が生き生きと輝く特別支援教育の推進」

○ 発表者 鹿児島市立武岡台小学校 榎 まゆみ

○ 司会者 鹿児島市立小山田小学校 野元 忠久

○ 記録者 鹿児島市立花野小学校 山下 佳子

【質疑応答】

(質問：八幡小 芝 隆志)

・温かい学校経営を感じる。職員の専門性の向上を図るため、校長として心がけていること、また柔軟な対応のための方策を教えてください。

(応答：武岡台小 榎 まゆみ)

・専門職の向上に関しては管理職が積極的に関わり、児童の実態把握、専門機関との連携に努めている。また、落ち着かない児童を管理職が預かっていたりしている。市教委の特別支援アドバイザーを活用することで、専門的な知識に基づいたアドバイスが得られ、職員も納得しながら聞いている。児童の変容を皆で共有し、「皆で」ということを重点的に心がけている。

(質問：花峰小 佐多 瑞代)

・子供たちや地域、保護者へ特別支援教育の理解促進・啓発のためにしていることを教えてください。

(応答：武岡台小 榎 まゆみ)

・学校だけでなく支援部よりも地域へ出している。子供たちのニーズに応える教育を目指している。

(質問：財部小 井手 英男)

・複数のコーディネーターを校内・校外と分けた取組はとても参考になった。利点を教えてください。

(応答：武岡台小 榎 まゆみ)

・校内コーディネーターは校内の支援計画を立てる等校外は巡回相談等対外的な計画、就学指導に係る内容という分け方をしている。

(質問：大原小 久保田 昭二)

・小・中・高で連携をしていけば教えて欲しい。また、体制づくりで一番苦労したことは何か。

(応答：武岡台小 榎 まゆみ)

・小・中・高で巡回相談や交流学习、居住地交流をしている。体制づくりは、職員の意識を変えることが最も課題であった。理解ある職員とともに現在も体制づくりを続けている現状である。

【グループ討議後の班ごとの発表】

・支援員の体制はありがたい。子供同士の関わりをどうするかが課題である。授業を乱す子を多様性として許すのか、放っておくのか難しい。

・教諭育成の視点は大事。ベテランだけでなく、年数の浅い教諭にも特別支援学級を担任させることは必要である。就学指導の悩みとしては祖父母世代の理解が中々得られないことである。

・特別支援学級と通常学級担任の打合せ時間確保が難しい。また支援学級ではない児童で、支援が必要な児童が多数在籍している。学校規模にかかわらず、どの学校でも、様々な場面で課題が多いと思われる。

【指導助言】

県教育庁 特別支援教育課 小中高等学校係 主任指導主事兼係長 前田 博美

・1校目の発表はウェルビューイングの向上を図るための、学習活動づくり・人間関係づくり・環境づくりであった。自由進度学習においては、めあてやまとめがどう設定されるのかという疑問がよく聞かれる。めあてはこれまで一つだったものが、一人一人のめあてになり、まとめもノートやロイロに個別にまとめさせることになる。ユニバーサルデザインの視点をもって改善していくとうまくいくと考える。その際、安全確保や環境整備は大事な視点である。

・2校目の発表では、校内の意識向上・教職員の資質向上がテーマであった。ポイントは関係機関との連携である。特別支援学校等専門家と連携しアドバイスをもらうことで分かりやすい授業への改善とつながる。

・インクルーシブ教育は、校長のリーダーシップが大事である。子供の困り感がどこから来るのか、専門家の意見を参考にしつつ、学びをサポートしてほしい。

(記録 花野小 山下 佳子)